

《総説》

同調, 服従行動としての社会的影響過程と自己統制感

—Deaux, K., Dane, F.C., Wrightsman, L.S., & Sigelman, C.K.

の「'90年代の社会心理学」をもとに—

原 岡 一 馬¹⁾

はじめに

社会的影響と自己統制感の問題は、社会的人間行動の重要な部分である。多くの社会的状況は何らかの社会的影響過程にかかわっており、これに対応して生じる自己統制感とは他者に対する行動ばかりでなく自分自身の行動についても考えられる。

社会生活では、職場での上司、家庭での親、社会の組織などが権力的方略を用いたり、命令を下したり、直接的な要求を出したりして、人々に影響を与えようと試みる場合がしばしばある。また、直接に影響を与えようとする働きはなくても、その場の雰囲気から他者の意図を汲み取り何だか従わざるを得なくなる場合が多くある。このような社会的影響に対する反応は、その状況へ適応しようとする動機にかかわるものである。たとえば、職場のほとんどが、始業時刻より30分前に出社しているのに、自分だけが5分前に出社するのは、規則に反しているわけではないのに何だか気が引ける。また、中学生や高校生の間では、どんな服装が仲間たちに受け入れられるかが気にかかり、正規の服装をするの方が拒否される傾向さえあることからわかるように、他者への同調行動が社会的に認められたものかどうか疑問である場合もあろう。

また、第二次世界大戦におけるナチのユダヤ人強制収容所における虐待命令への兵士の服従行動や日本軍における上司の命令に対する絶対服従行動など、強力な服従関係も考えられる。昨今、幾つかの会社で見られるように、上司から出された偽りの表示販売命令に社員が従ったり、原子力発電施設の故障隠しの命令に従うなど、明白に反社会的と思われる行動についての

服従行動などは社会においてよく見られる服従行動である。

われわれの行動や態度に影響を与えようとする試みに遭遇した場合、その場に応じて、服従すべきか拒否すべきかを決定しなければならない。この過程には、自己の行動についての統制の問題がある。つまり、自分の行動を自分で統制できると思う程度に対し、他者が自分の行動をどの程度決定できる勢力をもっているかと認知するかによる影響の問題にかかわってくる。この影響と統制という基本的問題が社会的影響過程の焦点となる。

そこで、いろいろな形の社会的影響に対する反応、つまり、同調行動と服従行動を検討してみることにする。次に、その場合、自己統制がどうして重要なのかの問題を検討し、人々が生涯において自己統制感を喪失した場合、どのような反応を行うかも検討することにしよう。

本論文では、これらの行動に焦点を当て、同調、服従、自己統制感などについて、これまで行われた研究を主として Deaux, Dane, Wrightsman, & Sigelman (1993) の研究を参考にレビューしてみたいことにする。

1. 同調行動

日常の社会的交わりにおいて、判断に窮するのが冠婚葬祭に出席する際に包む金額の決定である。「気持ちだけで十分ですよ」と言われても、少な過ぎて笑いものになるのではないかと、多過ぎて「あの人はどうかしていないか」など陰口されはしないかと不安である。このような時は、何人かの人に聞いた上で決定

1) 久留米大学文学部

することが多い。

これに対し、職場で懇親会をやろうという提案が出たとき、本心は出たくないのだが、出ないと「付き合いが悪いやつだ」と言われるのではないかと不安で、仕方なく出席することもある。また、宴会でみんなはビールを飲むのに、自分だけソフトドリンクにしてくれと頼むのもなんとなく気がひけて、身体には良くないと思いながら私も飲みますと言ってしまう。これらは、他者から明らかに圧力があるわけではないが、潜在的に何らかの圧力を感じ、みなと同じような行動をとってしまう行動である。

このように、同調とは他者の要求に従うよう直接的要請がなされないのに、他者や集団の圧力を認知しそれに屈することを意味する (Deaux, K., et al., 1993)。

同調行動の初期の研究

同調行動についての初期の研究に自動運動を用いた Sherif の実験研究 (1935) と線分の長さを推定させた Asch の同調研究 (1951, 1956, 1958) がある。これらの実験研究は同じような同調行動として取り扱われることが多いが、違った同調のメカニズムを持つと考えられる。その点を検討してみよう。

Sherif の自動運動を用いた研究 (1935) では、暗室の中で唯1つの静止した光点を見たとき、それ以外の準拠点がないので、動いているように見えるものである。Sherif はこの現象に着目し、これを用いて他者の反応による影響を研究した。光点の動きについての被験者の反応は、他者の推定により多めに影響を受けることを見出した。たとえば、被験者が一人でテストを受けた場合は、ほんの少しの動きしか報告していないのに、サクラと一緒にテストされた場合は、最初の推定値よりずっと大きく動いたと報告している。また、サクラが何も影響を与えない場合は、被験者の判断は最初はばらついているが、次第に平均に向かう傾向を示した。

Sherif の実験状況で同調が生起するのはそれほど驚くべきことではない。つまり、暗室の中での光点の動きという状況では、刺激は漠然としており、他に何の情報源も手がかりもない。この場合は明白な判断の基準が何もないので、少しでも情報を求めようとする。そのため、他者の判断が基準となるのである。

これは、上述の冠婚葬祭に出席する際に包む金額の決定の場合に似ている。これは情報的影響過程である。

これに対し、Asch の同調研究 (1951, 1956, 1958)

はどうであろうか。

Asch が初期の同調研究 (1951, 1956, 1958) において用いた基本的手続きを概観してみよう。

視知覚の実験を行うということで被験者が集められる。被験者は他の6人の被験者と一緒に部屋に入る。実験では、1本の縦の線分が基準線として示され、他に3本の縦の線分が示され、その中のどの線分が基準線と同じ長さであるか尋ねられる。3本の線分のうち1つが基準線と同じ長さである。他の2つの線分は基準線とはっきり違うので、被験者は結果がはっきりしていつまらない実験だと考え始めたと思われる。第1回試行では、すべての被験者が正確に見分けることができた。第2回目も同じである。ところが3回目になると、他の被験者のうち1人 (サクラ) が間違っただけの選択を行う。被験者は「不注意から間違っただけの選択をしたんだな」と思う。ところが、次の被験者 (サクラ) も同じ間違いの選択をする。続いて、3人目、4人目、5人目の被験者 (サクラ) も同じ間違いの選択をする。そこで、それらの線分をもう一度見直すが、やはり、初めに行った試行と同じように正解ははっきりしていると思う。被験者は自分の番がきたとき、どう回答するだろうか。他の被験者たちと同じ回答をするか、それとも、明らかに正答と思われる回答をし続けるだろうか。被験者は、他の人たちから、間違っていると思われそうな危険性のある判断をするだろうか。これが、Asch の実験手続きの一部である。

他の被験者は、実際にはサクラであり、また、本当の被験者は、常に、最後に反応するように仕組まれていた。この研究条件で正しい選択は、通常なら単純なものである。サクラがいなければ、どの被験者も線分を正しくマッチさせることができる課題であった。この単純さにもかかわらず、同調行動を引き起こした Asch の手続きは、社会的影響と自己統制の過程が現れるような基本的特性を示したものといえる。この状況は、前述の職場での懇親会出席の例に似ている。つまり、規範的影響過程である。

Asch の基本的手続きでは、すべてのサクラが正解を行う幾つかの試行の間に、間違っただけの反応をする実験試行を12回散らばらせて置いている。このときの50人の被験者の同調行動を調べている。すべての偽りの実験試行についての被験者の反応をみると、反応の32%が同調していたことがわかる。被験者は12回の試行のうち平均3.84回同調していた。しかし個人差が大きいので、平均より同調反応の分布の方が重要と思われる。偽り実験試行において、少なくとも1回多数者に同調

した人は、被験者のおおよそ75%であった。4名の被験者(8%)は12回の試行のうち10回以上も同調していた。同調は、確かに全体的に見られるが、すべての被験者がいつも同調していたわけではない。Aschの被験者の多くはたまたま同調していたということである。

Aschの線分の長さの判断事態では正解は明白であり、被験者は何も明白な集団圧力にさらされているわけでもない。それなのに同調が生起する現象が生じたというのである。

これらSherifとAschの初期の実験研究から、集団は、個人に2つの種類の影響を行使すると考えられる。1つは、事実に基づいた情報探索に基づく手がかりとしての影響であり、もう1つは、社会的圧力に基づく規範的影響である。その同調過程において、集団に対するその個人の同一化の問題が生起すると考えられる。

同調の理由

他者の意見に同調する人間の傾向をどう説明できるであろうか。DeutschとGerard(1955)は、異なった2つの型の社会的影響を提案している。つまり、情報の影響と規範的影響である。情報の影響は、事実の提示あるいは事態についての知識にかかわるものである。1人の個人には利用不可能な情報を他の人々が持つというだけで、情報の影響を生み出すのである。たとえばSherifの実験では、被験者は、光点がどれだけ動いたか(動いたように見えたか)について不確かであった。そこで、決定をするのに他者からの情報に頼って判定したのであった。Sherif(1936)は、さらに、他者がその場になくなった場合でも、光点の動きの推定は、他者の推定値によって影響され続けたことを示した。Sherifの被験者は他者の推定を客観的証拠と考え、その情報の基の源泉がいなくなった場合でも、それをうい続けたのである。このように、情報の影響は、服従行動の理由を人々に提供するものといえる。

これに対し、規範的影響は、服従への圧力を知覚することにかかわるものであり、集団規範が存在し、他の集団メンバーのように在りたいという要求と逸脱者になりたくないという要求の組み合わせによって集団圧力がもたらされる。Aschの実験では、被験者は、どの線分が標準と同じで、どの線分が長く、どの線分が短いか容易に告げることができるものであった。それでも、サクラの意見がかなりの影響力をもったのは、

多分、被験者が「変わり者」と思われる危険性を犯したくなかったからだと思われる。

最近、AbramsとHogg(1990)は、情報的影響と規範的影響の基本過程として、自発的に自分を集団の1メンバーとして含ませる自己カテゴリー化という概念を提案した。われわれは、他者を「男性」「女性」「若者」「老人」などとして、自動的に分けて考えているものである。このように、他者がある集団のメンバーとして分類すると、直ちに、その人もその集団成員に共通するある種の特性を持つものと認識するというのである。(Fiske & Nruberg, 1990)。AbramsとHoggは、人は他者についてばかりでなく自分についても同じように分類するものであると提案している。一旦、自分を特定の集団のメンバーとしてカテゴリー化したら、自己一貫性のメカニズムが働いてその集団のメンバーシップを保持しようとするというのである。自分がある集団に所属させると、その集団の特性が自己概念の顕在的特性となってくるのである(Tajfel, 1982)。つまり、自己概念の他の側面もその概念に一貫するように変えようとすると考えられる。したがって、集団のメンバーシップを保持することは、集団規範に一致するように行動することを意味する。AbramsとHoggによると、同調が起こるのは、同一視している集団のメンバーシップを得ることによって、自己概念を保持することができるためだというのである。

同じ人間が、時間や場所が違っていると極めて違った集団規範に同調するという現象を説明するものとして自己カテゴリー化という考え方がある。つまり、ある個人が1つの集団規範へ同調したからといって、他の集団規範を受け入れないわけではないというのである。自己カテゴリー化の過程において、同調が起こるのは、その集団がどの程度顕現的になっているかに依存するものである。クラシック音楽に熱狂している友達の間では、ロック音楽が好きでもそのことをあえて言おうとはしないと思われる。昔の小学校時代の友人たちと会っているときは自然に方言を使っていた人が、職場の上司や同僚と話すときは、職場特有の用語を自然に使っていることに気づくであろう。どちらの場合も、その時点で顕現的になった集団に対して同調が起こるものである。

ある人が同調しない場合も、自己カテゴリー化の原理によって同じように説明できる。たとえば、2つの異なった型の非同調反応を考えてみよう。1つは独立性であり、集団規範に反応しない行動と規定される。誰もがカジュアルなスラックスに替えているときに、

青色のジーンズを着続けている人は独立性を示していることになろう。また、髪を短くした人が、友達のほとんどが同じように髪を短くしたときでも、それと関係なく自分の髪を短いままにしておくのも独立性を示しているといえよう。自己カテゴリー化の用語を用いると、「すべての他者から構成されている集団」は自己概念を保持するための顕現的な次元とはならないということである。したがって、独立的な人は、その集団のメンバーシップを規定している規範に同調しなかったり、注意を払わなかったりするものである。これと対照的に、別の非同調性は集団の規範に一貫して反対するという反同調の特徴である。反同調の人はみんながドレスを着ているときは青いジーンズをはくが、青いジーンズが流行し出すとドレスに替えるような人である。自己カテゴリー化の用語では、反同調者は「自分は他のみんなとは違う人間だ」とカテゴリー化し、自己概念の側面を保持しようと集団規範と非一貫の行動を積極的にとり続けるものである。

たとえば、自己カテゴリー化の重要性を示した2つの研究結果を考えてみよう。Deutsch と Gerard (1955) は、Asch の手続ききを再現して、集団メンバーシップを明らかにした。被験者が明らかにその集団メンバーとして明確にされた場合は、誤りの数(同調の度)はかなり大きくなった。実験のために臨時に形成された集団であっても、集団の一員として明確にされると、被験者は自己概念の中に集団のメンバーシップを十分組み入れたと思われた。このように、被験者は自己概念を保持するために集団に同調したといえる。

また、Abrams と Hogg (1990) は、Sherif の自動運動の手続ききを用いて反同調性を吟味した。6人が同時に暗室に入った。3人は真の被験者で他の3人はサクラであった。2つの集団からなっているという認知を作り出すために、被験者の推定値より一貫して5センチ長い推定値をサクラに回答させた。明確な集団条件では、真の被験者がサクラと対抗するように競争課題を用いた。被験者の推定値とサクラの推定値は、明確な集団条件においてより大きかった。このように、情報的影響(自動運動効果)と規範的影響(Asch の手続きき)とは共に自己カテゴリー化を通して強められたと考えられる。このように、その過程は反同調と同じように同調の場合にも働くといえる。

人は必ずしも集団圧力に同調するとは限らないのと同じように、集団における社会的影響は両方向に働くことを認めることも重要である。Moscovici (1985) は、多数者が個人や少数者に影響を与えるばかりでな

く、少数者も多数者の信念や行動に影響を与えることができる」と指摘している。同調という現象は社会生活の一般的規則性を理解するのに役立つが、少数者が多数者に影響を与えようとしてしばしば成功するのは、集団が設定している規範を変化させるうることを示したものとといえよう (Kruglanski & Mackie, 1990)。

同調に及ぼす要因

人々が集団規範に同調する程度に影響する要因はいろいろ考えられる。その1つは集団の大きさの要因である。一般に、集団が大きくなればなるほどその影響は大きくなる (Latané, 1981; Tanford & Penrod, 1984; Wolf, 1987)。集団が大きくなるにつれ、多くのメンバーが集団規範に従う理由が多くなる。また、集団が大きくなるにつれ、集団内のある個人が同調への圧力を行使する勢力をもつようになってくる (Insko, Smith, Alicke, Wade, & Taylor, 1985)。しかし、集団の大きさが3人を超えると、大きさの効果性はかなりの程度減少してくる。

集団の大きさが効果性をもつ重要な要因は、集団メンバーが1つの統合体とみなされる程度である (Wilder, 1977)。4人の個人が別々ではあるが、すべてが明らかに間違った答えをする Asch 型の実験事態と、4人が1つの集団あるいはクラブのメンバーとみなされ、真の被験者は自分はそれに属していないと思うような事態との違いを考えてみよう。後者の場合、同調への圧力の効果は少なく、単一の個人によって行使される圧力により近くなる。言い換えれば、4人の声は、實際上1人の声を示すものと考えられ、多数者の大きさは重要性が少なくなる。基本的には、「それらの人々」に同調するという問題は「その1つの集団に」同調するという問題となる。しかし、上述したように、その被験者がその集団に所属する場合は、「その単位」が相当大きな影響をもつことになる。

これまでは、同調を1人の個人が同じような数人の他者の中の1人であるような場合として論じてきた。ところで、他者に意見の一致がない場合はどうであろうか。また、明らかに多数者と少数者がある場合はどうであろうか。集団に意見の一致がない場合は、多数者への同調は極端に減少する。この場合は、少数者もそれ自身の権利を持つという形で、影響源となり、それもまたメンバーに影響を与えることになる。たとえば、意見が分かれた陪審員では、未決定の1人に対し「どちらかにつけ」という決定への圧力が有罪賛成の陪審員からと無罪賛成の陪審員から同じようにかかっ

てくる。多数者の数が圧倒的に多くなると、その立場も同調の量に影響する。集団の立場とその個人の立場が食い違っていればいるほど集団規範への移動に向かう圧力を強く感じることになる。また、集団の立場が自分の立場に次第に類似してくる場合より、違いが次第にはっきりしていく場合が、同調への圧力へ屈しやすくなる (Campbell, Tesser, & Fairey, 1986)。したがって、有罪に向かった決定をする陪審員が多ければ多いほど、未決定の陪審員は有罪を決定するような圧力の増大を経験することになる。

II. 服 従

命令の形でなされる直接的要請への応諾反応に服従がある。われわれは、親、警察官、信号機などある種の権威のシンボルに従わねばならないという圧力がある程度感じるものである。しかし服従は、よりよい判断を行おうとする傾向に抗して極端な行為を取るよう導くこともあるし、破壊的な程度にまで進むことさえある。このような破壊的服従の2つの例がある。南ベトナムの村人22名を殺そうとしたとき、アメリカの陸軍大尉の Calley はただ命令に従っただけだと言ったという。第二次世界大戦中に、第3帝国から認められていなかったユダヤ人、ジプシー、同性愛者、政治犯など600万人を皆殺しにするという命令に、その実施の責任者であった Eichman は言われたとおり行っただけだと言い、戦争犯罪の裁判において、道徳的責任を否定した。彼は、単に自分の仕事をやっただけだと言ったのであった。

人に傷害を与えるような服従の実験研究

Eichman や Calley の場合は特別に異常なケースであろうか。Milgram (1965) は、通常状況で他者の生命を危険にさらすかもしれないと思ったときでも、人々が権威に服従するかどうかを確かめようと試みた。Connecticut 州の New Haven で、宣伝や直接メールを用いて被験者を勧誘した。お金を払うのでエール大学の研究プロジェクトの参加者になって下さいと求めた。その結果、いろいろな職業や年齢の男性40人が集まった。それぞれの被験者が実験室にやって来たとき、実験者を紹介すると共に1人の仲間を被験者の1人だと紹介した。また、実験の目的は学習に及ぼす罰の効果を確かめることだと告げた。2人の被験者が対になって実験を行うが、教師の役と学習者の役のどちらをとるかを決めるためのくじ引きを行った。くじは偽装されていて、真の被験者が常に教師の役になり、サクラ

の被験者が学習者になるように仕組まれていた。学習者は隣の部屋に電線で繋がれた椅子にくくり付けられた。手首に電極がつけられたところで、被験者に提示してもらった課題が告げられた。

その課題は言語学習課題であった。教師の役割を取ることになった被験者は、学習者が間違った解答をしたら、その都度、電気ショック発生器を操作して電気ショックを与えるよう告げられた。その機器には30個のスイッチがついていて、15ボルトから450ボルトまでにわたって15ボルト刻みで電流をコントロールできるようにになっており、下の端には「かすかなショック」上の方には「危険・厳しいショック」、一番端には「最悪 ×××」という表示がなされていた。この装置は偽の発電機で、実際には学習者であるサクラには電気ショックが伝わらないようになっていた。しかし、見かけは本物そっくりで実際に機能しているように思えるものであった。

サクラが意図的に間違いを起こすと、実験者は被験者に一段階高い電気ショックのキーを押すよう指示した。被験者が300ボルトのキーを押すと、サクラは2つの部屋の間の壁を叩き始めた。ある時点から、被験者が提出した問題に反応しなくなった。この時点で、たいていの被験者は実験者の方を振り向いて指示を求めようとした。実験者は平然とした態度で、回答のないのは間違った解答として取り扱うべきだと回答し、学習者はスケジュールどおり電気ショックを受けるべきだと言った。

何人の被験者が実験者の命令に従い続け、一連の系列の電気ショックをすべて与えるかというのが Milgram の基本的問題であった。その結果、どの被験者も300ボルトつまり、学習者が壁を叩き始める時点までは電気ショックを与え続けた。その時点で、5名の被験者が拒否した。つまり、14%が実験者の命令を無視した。その電気ショックが他者を傷つけると思い込んでいた被験者の約3分2が実験者の指示に服従した。Milgram は、われわれの社会では命令に対する服従は強力なものだと結論づけた。

この実験から、ある匿名の実験者が50歳代の男性に服従するよう命令し、その人の抵抗にもかかわらず苦痛な電気ショックを強要することができるなら、巨大な権威と威信を持つ政府がその対象者にどれほど大きな命令を出せるかは驚くばかりであると述べている (1965, p.75)。

Milgram (1965, 1974) は、実験者が他者を痛めるように告げたとき、その命令に従うか拒否するかに影響

響する状況要因を研究する研究計画に拡張した。そこで、例えば、被験者が対象者に近ければ近いほど実験者の命令を拒否する傾向を見出した。このように、被害者が被験者と同じ部屋にいて、1.5フィートだけ離れている場合は、被験者の3分の1だけが最大の電気ショック水準まで進める傾向があった。また、実験者がその場にいないが、電話かテープレコーダーで命令を出した場合は、最も少なく服従することを見出した。実際、実験者が側にいなかった場合は、数人の被験者は要求された電圧より低い電圧の電気ショックを与え、実験者の権威に反抗した。Milgram は、典型的な手続きを逆転させて、権威は善のための力にもなり得ることを示した。この場合は、サクラである学習者が強い男性であることを示したいためその実験に参加し、電気ショックにチャレンジすると言って、受け続けると主張した。しかし、実験者が繰り返し中止するよう言うと、被験者は止めた。権威者の命令は、傷つけるにしろ助けるにしろ、強い影響力を持つと解釈された。

その後、他の多くの研究者が服従の生起条件を研究し始めた。いろいろな国でまたいろいろな年齢の集団で、同様な結果が得られた (Miller, 1986)。このように、服従はドイツ人や New Haven の人たちに特有な行動ではないことがわかった。それはわれわれの大部分の人に見られる行動であり、状況要因によって促進されたり弱められたりする行動である。つまり、服従は、どんな人間にも生起し、屈服という社会的影響過程の結果である。前述したように、全く新しい状況では、情報源として他者を当てにすることが多い。このような他者の1人が権威的人物として合法的勢力をもつ場合や、すべての可能な選択肢を完全に理解する時間が十分ない場合は、人は、権威的人物に服従しやすいものである (Milgram, 1974)。

服従研究についての批判と評価

Milgram の研究結果が印象的であればあるほど、いろいろな批判がでてきた。事実、社会科学の中でかなりの論争の的となった (Miller, 1986)。第1の批判は、この実験は非常に不快なものであって、それに関わった人たちの意図は非常に不快で、この実験は何の価値もないというものである。これに対し、反対の論議は、破壊的服従を作り出し、責任性の意図的な放棄に導びく、不法な権威の大胆な手段に挑戦するものであって、Milgram は、このような実験条件を切り開くに当たって、近代の心理学に最も道徳的に有意義な研究をやったと思われるというものであった。

この2つの主要な見方はしばしば激論にまでなっている。それは、実験の倫理と結果の一般化についての問題であると思われる。

実験の倫理

Milgram の服従実験に対する第1の批判は、被験者の権利が保証されていないことである。この実験では被験者に苦痛を伴う葛藤を引き起こす可能性があると告げておらず、実験者はこのような事態に陥れることについて被験者の承認を得ていないことである。現在では、これらの研究に対する一般からの反論があるため、参加者の承諾を得る前に、Milgram が被験者に与えた情報よりも多くの情報を与えるよう要求されている。事実、今日では、Milgram の研究の手続きをそのまま正確に行うことはできないであろう (Dane, 1990)。

第2の批判は、これらの実験への参加者は、その後長期にわたっていろいろな影響を受けていた可能性があることである。それらの被験者は、実験者、大学および科学全般に対して信頼をなくした可能性がある。更に重要なことは、被験者の自己概念が長期にわたって影響をこうむった可能性のあることである。大部分の被験者は実験に参加するまでは、極端な状況でない限り、自分が意図的に他者に苦痛を与えるなどしない人間だと思っていたであろう。実験に参加した後は、違った考えをもつようになった可能性がある。このような自己教育は有益だと考えることもできようが、すべての人にこのような教育を強要するのは実験社会心理学者が行う範囲外のことであるという批判である。

Milgram は、実験の終わりに、被験者が実験で経験した緊張や疑いや憤りを取り除くため十分説明したと述べている。そのデブリーフィングの手続きについて、次のように述べている。

面接の後、被験者が実験室を確実に安心感を持って離れることができるようにいろいろな手続きを取った。被験者とサクラとの間で友好的な和解が図られ、実験の結果生じた緊張がすべて解消するように努力がなされた (1963)。

Milgram は、さらに、精神医学者が面接を行い、長期にわたって有害な影響がないことを確かめるために追跡調査を行ったと報告している (1974)。

結果の一般性

Milgram の被験者にみられた強い程度の服従は、現実社会に一般化できるかどうかが問題となってきた。

例えば、権威者に対する信頼と服従は、実験において特に被験者に顕現的になっている要求特性であったからかもしれない(Orne & Holland, 1968)。言い換えれば、実験に参加し告げられた通りに振舞う被験者も、医者からの「毎日運動しなさい」という指示や職場で雇用者が親しい同僚に「あなたは首だ」と伝えなさいという指示には服従しないかもしれない。このような批判に沿って考えると、Milgramの実験は、Yale大学の高い権威が影響したとも考えられる。被験者たちはYale大学で行われる研究は、科学的で社会に受容されるものに違いないと信じ、服従に傾いたのかもしれない。

これに応えるために、Milgramは、Connecticut州のBridgeportの雰囲気がよくない地域の荒廃したオフィスの中で、男性を被験者として実験を行った。ここでの実験では、電気ショックの系列で最も強い端まで服従し続けたものは大体50%あったことを見出した。これは、Yale大学の権威によって、ある程度説明できることではあるが、その現象は大学の場とは全く違うところでも生起することを示した。

さらに、強力な階層をもつ組織体では、権威の影響がかなり強いことは周知の通りである。もし上司が人気のある部下を解雇すると言った場合、それに同意し、自分の態度とは反対にその命令に従うことがしばしば見られる。

服従実験の一般化の問題の他に、さらに、実験に対する被験者の反応を考えなければならない。確かに、作り出されるストレスについては倫理的問題が発生するが、一方、被験者にストレスを生起させたということは、手続きのインパクトの強さと現実性を実証することにもなっていると言える。

いろいろな批判はあるにしろ、Milgramの服従研究は、これまで考えられてきたものよりずっと普遍的であることを証明したといえよう。大学生でもなく、心理学者や精神医学者でもない一般人が、高い電圧のショックに到達したときにもその手続きを続けるよう告げられると、それに服従し続けたのであった。

III. 統制感

これまで見てきたように、人はいろんな状況のもとで、集団圧力に同調し、要請を応諾し、命令に服従していることになろう。しかし、人々に影響を与える社会的影響過程と状況的特性について検討すると、ある程度の抵抗が起こっているのもまた事実である。

研究者の間でも個人的統制の問題について意見が分

かれている。社会行動についての人間性的研究法では、人は自分の行動をほとんど完全に統制できるものであるという仮定に立っている。これとは対照的に、Skinnerとその後継者たちは、環境の中の刺激がわれわれの行動を決定すると考え、人は外的報酬と罰によって統制され、自己の統制力は単にわれわれの幻想にすぎないという立場をとっている(Skinner, 1971)。これら2つの立場の間には、いろいろな違いがある。統制の幻想がどのようにして起きてくるのか、統制の信念が行動にどのように影響するのか、現実生活において統制の不足はどのように反応を引き出すのかなど統制の問題について重要な問題が考えられる。

統制の幻想

われわれは一般に、日常生活において、身近な事象を統制できる力をもっていると信じているものである。純粋に偶然によって決定されるとわかっている事象の結果さえ統制できるという幻想を發展させることができる。Langerたち(1983)は、これらの信念を支持する説得力のある証拠を提示した。

偶然性によって勝者が決定する事態の一つはくじ引きである。くじ引きというのは、その結果に人が影響を持つ余地はほとんどないものである。それにもかかわらず、多くの人はその事態で何らかの統制力を行使できると思っているものである。この統制の幻想を示すために、Langer(1975)は、50ドルの賞金を得るのに1ドルのくじを買う機会を与えた。統制の幻想を変えるために、実験条件として、1つの集団には欲しいチケットを自分で選択するよう求めた。もう1つの集団には実験者がくじのチケットを無作為に割り当てた。くじを引く前に、実験者は被験者に近づき、買った値段よりどれくらい高かったらそのチケットを他人に譲りますかと尋ねた。チケットを割り当てられた被験者は平均1.96ドルで売ると答えた。これに対し、自分で選んだ被験者は、8.67ドルで売ってもよいとした。この傾向は、自分でチケットを選択した被験者は選択を行わなかった被験者より当たる確率が高いと信じていたためであろうと解釈した。

自分で選択してくじを買うのは自分に統制力があるという信念を高める1つの要因である。一般に、純粋に偶然事態だが、見かけ上現実の事態に類似していればいるほど、自分にその結果を統制する能力があると信じがちである。たとえば、競争は統制できるという信念を高めるものである。結果が純粋に偶然性によって決定されるときでも、競争者が有能に見えるときよ

り能力が低いと思われるときの方が、成功への信念を強くもつことになる (Langer, 1975)。例えば、スロットマシンを統制することはできないが、5歳の子どもが隣の席でやっている場合、自分の方がその結果をより多く統制できると思いがちである。同様に、関与する課題、関連する手続についての知識をもち、訓練などを受けていると、実際より多く結果を統制できると思いがちである。

またある課題に成功するとその事態を統制できるという幻想を生み出すことになる。Langer と Roth (1975) は、被験者にコイン投げ上げの結果を予測するよう求め、全体の成功が同じ率になるよう仕組んだ。しかし、1つのグループは最初に成功し、後で失敗するようにしたのに対し、もう1つのグループは最初に失敗し後で成功し、第3のグループは純粹に無作為の結果を経験させた。初めに成功した人は、その課題に対する自信をより多く持ち、将来の成功を予想し、自分はそれについてより高い技能を持つと見ていた。初期に成功を経験することは、明らかに結果を統制する能力に自信を作り出し、初回に大当たりした初心のギャンプラーが、最初買った額以上に負けてしまう例に極めて類似していた。

事象を統制する能力があるという信念は、コインの投げ上げやくじ引きの場合だけではない。人は自分の生涯において多くの事柄を統制できると信じているものである (Wright, Zautra, & Braver, 1985)。しかし、統制についての信念は状況により違うものである。人は好ましい事象を否定的な事象より多く統制できると信じるものである。望ましい事象は自分に関わりあるものとし、望ましくない事象は責任を回避することと一貫する。この型の統制についての信念は、他者の行動についての責任性の帰属とも一貫している。例えば、強制的勢力の下で応諾する人は、報酬勢力状況で応諾する人より統制力が少ないと知覚する可能性が高い。このように、一般に、統制の程度についての信念は、事象の過程を決定する能力をはるかに上回るものと言えよう。

統制できるという信念の結果

実際には統制力などほとんどないか全くないのに、事象に影響を及ぼす力をもっていると強く信じるのはどうしてであろうか。1つの理由は、このような統制力を持つという信念は、世の中を予測可能なものと見るからである。例えば、競争事態で相手と相互に競い合っていると思うなら、自分の結果を決定でき、相手

の行動を予測したいと思うであろう。実験から、われわれはこのような予測の能力を過大視する可能性があることがわかった。例えば、ある研究で、他の被験者と競争していると思っている被験者は、その相互作用をただ観察しているだけの被験者より、相手のパーソナリティを推論できると思っていたことが見出された (Miller, Norman, & Wright, 1978)。しかも、環境を統制できているときは、行動もまた変わるものである。

実際には何の統制も及ぼしていなくても、課題を行う前に、与えられている騒音を統制できている場合は、成果が良くなることを見出された (Glass & Singer, 1972)。環境を統制できる人は、周囲をより楽しいものと考え、自分の気分をよりプラスに考えるものである (Rodin, Solomon, & Metcalf, 1978)。一般に、何らかの統制力を持っているときの方が持っていないときより、広範な状況でより積極的に反応するものである。

統制できるという信念の力を最も劇的に示したものの1つに、Langer と Rodin によってなされた施設に住む高齢者の研究がある (Langer & Rodin, 1976; Rodin & Langer, 1977)。高齢者が自分の家に住んでいたときは、毎日、多くのことを自分で決定しなければならなかった。これと対照的に、典型的な施設では、統制は主として他者にあり、ほとんど決定をしなくて済む環境である。このような心理的要因は、身体的要因と同様、あるいはそれ以上に幸福感を決定するものと考えられる。

この仮説を検証するために、Langer と Rodin (1976) は、Connecticut の養護老人ホームのスタッフの協力を得て、居住者を2つに分け、1つのグループの居住者には彼らの活動の責任をスタッフにあると強調した。居住者には一本の植物が与えられたが、その世話は看護婦が持つと告げられた。同様に、ある映画を見ることが許されたが、その映画がいつ映写されるかはスタッフが決めると告げられた。これらのメッセージは居住者の統制感を最小にするものであった。これに対し、もう1つのグループのメンバーには、自分で責任を持ちなさいという示唆が与えられた。部屋の中の家具を配列することから自分で時間をどのように使うかを決定することまで自分でやるように言われた。さらに、もし現在の家具の配置に不満があれば、そのことをスタッフに告げるように奨励された。このグループにも一本の植物が与えられたが、自分の欲しい植物を選んでよく、その世話を自分でやりなさいと

告げられた。最後に、映画を映写することになりますが、見るか見ないか、いつ見るかは自分で決めなさいと告げられた。

3週後に質問を受けた際、個人的統制を強調された集団のメンバーは幸福度が有意に増加していたことを報告した。看護婦たちの観察から、集団における活動が実質的に増加し、これらの居住者の精神的状態が改善したと判断された。つまり、他の患者との会話、その養護施設外の人への訪問、スタッフとの会話などが増加していた。約束した映画を見ることができたとき、その映画を見に来た人は自分で決定することができた人の方が多かった。

もっと顕著な統制の効果を示した証拠は、18ヶ月後に養護老人ホームでの観察において見出された。看護婦たちの観察結果によると、その時点でも責任をとるよう奨励された集団はより活動的で、より社交的で、生き生きとしていると評定されていた。最も顕著だったのは死亡率の違いであった。統制群の患者の30%がその期間中に亡くなっていたのに対し、責任感をもったグループの居住者は15%だけが亡くなっていた。この結果は、自分の生活における統制の重要性を強く示す証拠といえよう (Rodin & Langer, 1977)。

統制できるという知覚は、他者の行動に対する反応にも拡張するものである。例えば、Fleming と Darley (1990) は、被験者にすごろく遊びをしている人々についての状況を知らせ、それらの人がサイコロに統制力をもっている程度を推定させるような実験を行った。途中からその計画に参加する場合や代わりにサイコロを振ってくれる人がいる場合より、始めからその計画に参加した人の方がより大きな統制力を持つと判断した。被験者たちは統制力を持っていると想像した人に高いお金をかける傾向があった。もちろん、ゲームをやる人は実際にはサイコロに何の影響も与えることはできないが、影響をもちうるという幻想が強い信念を持ってその人たちにお金を賭けさせる力となっていた。

統制についての知覚の個人差

統制についての一般的信念は、人々の間に極めて大きな個人差があるようである。Rotter (1966) は統制の位置 locus of control という概念を提唱した。人は一般に、自分の生活での統制は主として自分の内にあると思うか自分の外にあると思うかの傾向があると指摘している。内的人々は事象を統制するのは自分自身の能力にあると信じる傾向があり、外的人々は、自

分以外の環境や他の人々が主として影響すると信じるものである。Rotter の考えは一般的意味では正しいが、あまり単純すぎる傾向がある。例えば、外的統制という考えには、運命に関し、強力な他者に関し、困難な世界に関し、政治的影響のない世界に関するものなど、幾つかの違った信念を含むものであろう (Collins, 1974, Gurin, Gurin, Lao, & Beatie, 1969, Mirels, 1970)。

統制の位置という概念はいくらか漠然としているけれど、人々は、その世界への接近の仕方やその環境への効果性についての感情に典型的な違いがあることがかなり研究されてきた (Phares, 1976; Strickland, 1977)。例えば、自分の行動が外的に統制されると思っている人は、内的に統制されると信じている人より、社会的試みに同調しやすいものである。他方、社会的試みに服従する人のうち内的統制の位置を持つ人は、不協和などのメカニズムを通して、自分の行動と一貫するように態度を変える傾向がある。また、内的統制の位置の人は外的統制の位置の人より、暴風雨のような自然の災害を避けるために前もって警戒をしやすくと考えられる (Sims & Baumann, 1972)。

統制の位置が内的であろうと外的であろうと、多くの人は、少なくとも事象に対して何らかの統制力を持っていると思いやすいものである。しかし現実には、必ずしもこのような統制は可能なわけではない。現実にはしばしば、自分の運命を統制すると思われる人がいたり、何かがある事態に直面したとき、選択の自由が厳しく限定されることがある。ある場合には、他者の統制の下にあると思うと、いらいらしたり欲求不満を起こしたりすることになる。

学習された無力感

自分に統制力があるという信念が出てくる要因の1つは、結果が予測できることによるものである。つまり、予測可能性と統制感は密接に関連していると思われる。われわれの生活で慣例というのは予測可能性の感覚に基づいたものである。JR や私鉄を日頃使用している人なら切符を入れるとそれに穴があき反対側からでてくることを学習してきているものである。切符を入れても出てこなかったり、ブザーが鳴ったりしてうまくいかなかったら、入れ方が間違っていたのか、期限切れの切符でなかったか、それとも機械の故障かわからず戸惑い、欲求不満を起こすことになる。このように決まりきった手順が破れると、予測可能性と統制力が共に脅かされ、自分の成果を統制する力に疑

いを感じるようになるものである。人生において、同じ行為が必ずしも同じ結果を導くわけではない。このような予測できない結果を経験する事態はたくさんある。

自分の成果が自分の行為と無関係に起こるものだという信念を Seligman (1975) は、学習された無力感 *learned helplessness* と規定した。この問題について最初に行われた研究は動物を用いてなされた。被験体が最初に避けることのできない電気ショックにさらされると、その後、実際には避けることができる場合でも、電気ショックを避ける方法を学習できなかったことを見出した。Seligman は、統制できない結果に伴う経験から3つの欠如がもたらされると指摘している。第1に、動機づけが失われることである。動物は新しい行動を学習しようとはしないのである。第2に、ある試みを行って失敗すると、認知が欠如していくことである。つまり、動物は新しいことをしようとしなくなるので、その経験から新しいことを学習しないことになる。第3に、この種の経験を繰り返すと感情的不安定となる。つまり、動物は結果を統制できないことによって抑うつに陥るのである。

この現象は人間にも適用可能であると思えるが、人間の場合、1つの付加的要素、すなわち、その個人がその事態に責任を持てるかどうかという要因を考慮しなくてはならない。心理学の試験を2つ受け、2つとも欠点を取った場合を考えてみよう。1つについては一生懸命勉強し、もう1つの試験はちょっとノートを見ただけであったが、両方とも失敗した。自分の行動から結果は不確定である。そのとき学習された無力の状態や抑うつ感を体験するだろうか。もし外的帰属を行うなら、たとえば、その試験は不公正で、誰もが失敗していたなら、無力さを感じるだろうが、個人的に失敗を感じることはなかろう。しかし、内的帰属を行うなら、つまりその失敗は自分に特有なもので他者とは関係ないと見ているなら、その反応はもっと厳しいものとなる。個人的無力さへの帰属は自尊心の低下となり、抑うつになるであろう (Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978; Peterson & Seligman, 1984)。

このように、人間における学習された無力さの経験は複合した説明となる。望ましくない結果が (1) 内的要因に帰属され、無力さがその個人の問題になるなら、抑うつは厳しくなるだろうし、(2) 安定した要因に帰属され、無気力が慢性的になるなら抑うつは厳しくなるだろうし、(3) 全体的要因に帰属され、無力さ

が他の事態にまで一般化されるなら抑うつは最も厳しくなるであろう。もし試験における失敗を自分の一般的な愚かさに帰属させるなら、他の過程における成果についても、大学におけるカリキュラムについても、遂には大学そのものも避けるようになるであろう (Mikulincer, 1986)。

込み合った環境はまた社会的統制を規制する個人の能力に影響するし、また学習された無力さの感情にも影響する可能性がある。例えば、Rodin (1976) は、高度に密集した地域に住んでいる子どもたちは、密集していないところに住んでいる子どもたちより成果の統制を仮定することが少ないことを見出している。彼らはまた、うまくパズルを解くことが少なかった。自分の環境をほとんど統制できない入院患者は、入院の期間が長くなればなるほど、身体的条件は快方に向かっていても、次第に治療の効果が低下していくことがわかった。(Raps, Peterson, Jonas, & Seligman, 1982)。

しかし、どうして人は容易に学習された無力感の状態に陥るのであるだろうか。どうしてその状況に反抗しないだろうか。時には反抗することもある。その人が最初統制力を持たないと信じている事態では、学習された無力さが直接的反応となるであろう。これとは対照的に、Wortman と Brehm (1975) は、最初、統制できると期待していた場合は、まず抵抗を示し、次第に無力性を感じることになろう、と予想している。つまり、ある事態を統制できると思っている人は抵抗を示すが、このような期待を持たない人は、学習された無力感を感じるであろうというのが基本原理である。研究の結果、抵抗から学習された無力感への移行は徐々になされることがわかった。偶発的に成功することのない結果を何回も経験すると、ついには、統制できるという感覚を失うこととなり、その点で、抵抗に代わって無力さが主要な反応となってくる。

Baum, Aiello, & Calesnick ら (1978) は、この仮説を現場研究を用いて確かめようとして、大きな集団か中程度の大きさの集団で生活している寮生を選んだ。Baum らは、標準的共同課題か競争課題かのどちらかをやらせるために、被験者を実験室に入れ、その住居に住んでいた期間の長さ (1週間か3週間か7週間) の関数として彼らの成果を評価した。低い統制的集団に短期間 (1週間か3週間) 住んでいた学生は、生活条件について否定的感情を報告したが、高い競争的行動を示した。Baum は、競争的行動は統制を主張しようとする試みを示したものであると解釈した。しかし、

更に数週間低い統制事態に住み続けると、統制しようという試みは幾らか放棄されるように思えた。彼らは否定的になることが少なく、その条件を受け入れるようになった。その過程での競争的行動は少なくなり、関与と動機づけが少なくなり、より逃避傾向を示すようになった。このように、学生たちは、寮の計画だという事実によって規制され、結果を統制できなくなると、あきらめと無力さの感情に変わっていった。これに対し、高い統制の住居人は、その行動は他の居住人より適応的であり、その研究の過程で何の変化もなかった (Baum, Aiello, & Calesnick, 1978)。

自己誘導された依存性

結果を統制できないことを体験することは、統制力の喪失を感じる1つの原因となる。また、無能力という幻想を生み出すと同時に喪失感を生み出す可能性がある。例えば、他の人たちが直接その人に無能力であると指摘したりすると、本人もそう思い始めるかもしれない。Langer (1983) は、高齢者が明確に機能障害があると、直接無能力感を感じるようになることを指摘している。一般に社会では、高齢者は既に全盛期が過ぎ去った人であり、身体的、知的能力は低下し、友人や親類や施設の係員の援助に依存しているものと考えて、高齢者を軽蔑する傾向がある。Langer は、このような人々の取り扱いが不適正であるばかりでなく、高齢者自身にそう思わせるように働く可能性があると言っている。依存的だとラベルを貼られた高齢者は、自らそのラベルを信じるようになっていく可能性があるというのである。

このように、自分で誘導された依存性がリアリティをもつようになることが、Langer と Benevento (1978) の研究から明らかになった。彼らは高校生を被験者に、先ず、言葉探しの問題を解くよう求め、その課題に成功の経験をもたせた。第2段階で、他の被験者 (実際はサクラ) とチームを組んで課題をやらせた。予め決められた抽選によって、被験者は手伝いの役割を与えられ、サクラはボスの役割を与えられた。被験者が手伝いの役割を与えられ第2の課題をやった後、個人的にもう一度、最初に行った言葉探しの課題を行った。今度は被験者の成果が50%まで低下した。つまり、彼らは従属的役割を行った後では、半数の言葉しか位置づけ得なかった。これに対し、手伝いの役割を行わなかった統制群の被験者は、最初と同じ程度の成果を上げた。

この実験で最も驚くべきことは、ほんの少しだけ手

伝いの役割を経験しただけなのに、その後、成果に強い影響があったことである。このようなことから、高齢者や従属的役割を強制されている人々には依存性が広く生じる強力な影響があることを想像することができよう。Langer (1989) は、自分の環境に統制力を持っていることの肯定的結果の1つは、注意の状態と生き生きとした意識の増加であるとしている。Langer によると、努力するとき、あるいは努力しようとするときは、注意を必要とし、自己統制できることは、学習、記憶、身体的健康を高めるものであると考えられる。

要 約

社会的影響と個人的統制の問題は、人間行動の中心的なものである。多くの社会的状況は社会的影響のある側面にかかわっており、個人的統制感他者についてばかりでなく自分自身についての決定に影響するものである。

同調とは、集団に従うよう直接の要請がないのに、集団の圧力に服従することである。Sherif と Asch の研究は、それぞれ、個人の行動に及ぼす集団の判断の影響を示した初期の研究である。集団は、個人に2つの種類の影響を行使するものである。1つは、事実に基づいた情報的影響であり、もう1つは、社会的圧力に基づいた規範的影響である。同調は一部において、集団に対するその個人の同一化に依存するものである。

非同調行動には2つの型がある。独立的行動とは、集団の立場に何の関連も持たなくて生起する行動のことである。これに対し、反同調行動とは、集団が行うことに正に反対する人である。その意味では、反同調行動の場合、集団はその個人の準拠点といえる。同調行動についてはいろいろな状況要因が考えられる。たとえば、集団の大きさ、その個人の意見に同意する人の数、集団メンバーの地位、課題の型などが同調の程度に影響する可能性がある。

服従の研究から、その服従行為が他者を傷つける場合でさえ、多くの人々が容易に命令に従うことがわかった。犠牲者が被験者の近くにいる場合や、命令を出した人がそこになかった場合は、服従行動は少なくなることがわかった。

服従研究に対する批判は、倫理的問題とその一般性についてである。それにもかかわらず、これらの研究は、社会的影響の試みが他者の行動を変えることがかなり強力であったことを示している。

同調や服従への圧力にもかかわらず、人は自分自身を統制しているという信念を広く保持しているもので

ある。明らかに偶然によって結果が決定された場合でも、人は自分が統制しているという幻想をもつものである。この幻想を強める要因には、競争、その課題への関与、知識と実践、必要な技術への事態の類似性などがある。

自己の統制力を信じることは、成果を上昇させ、より積極的な感情を作り出すものである。人は自分の統制力についての知覚にいろいろな違いがあり、ある人は外的統制力を信じる傾向があり、またある人は自分の内的統制力を強く信じるものである。

人は一般に、自分の統制力を信じているので、統制力の喪失を意識したり、実際に喪失することに対しては強い反発を引き起こすことが多い。心理的反発は人が自分の自由が制限されたと感じた場合に起こるものである。リアクタンス理論によれば、人がこのような脅威を意識したとき自由の感覚を取り戻そうと試みるものだと考えられる。しかし、統制力が強くて自分を傷つけたり、他者を傷つけたりすることがある場合には、他者の統制を受け入れることがしばしばある。

学習された無力さは、結果が自分自身の行動に一致しないような状況から引き出される。明らかに自分の努力と無関係な結果を経験した人は、自分自身の反応がその結果に何の効果ももたないという信念を作り上げるものである。人が自分に統制力がないと思うことによって、たとえば、動機づけ的、認知的、感情的ないろいろな欠陥がもたらされるであろう。

結果が自分の努力と無関係な場合でも、自己誘導的依存性が出来上がるであろう。人に依存的であるとラベルを貼ることは、ラベルを貼られた人が、自分の行動は主として他者の行動に依存していると信じ始めるため、その後の行動に減退を引き起こす可能性がある。自分で統制しようとする試みは、一般に、成果、学習、身体的健康を向上させようとする心構えにかかわる傾向がある。

文 献

- Abrams, D., & Hogg, M.A., 1990, Social identification, self-categorization, and social influence. *European Review of Social Psychology*, **1**, 195-228.
- Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P., & Teasdale, J.D., 1978, Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49-74.
- Asch, S.E., 1951, Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgments. In H. Guetzkow (Ed.) *Groups, Leadership, and men*. Pittsburgh, PA: Carnegie Press.
- Asch, S.E., 1956, Studies of independence and conformity: A minority of one against a unanimous majority. *Psychological Monographs*, **70**.
- Asch, S.E., 1958, Effects of group pressure upon modification and distortion of judgments. In E.E. Maccoby, T.M. Newcomb, & E.L. Hartley (Eds.) *Readings in social psychology* (3rd ed., pp.174-182). New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Baum, A., Aiello, J.R., & Calesnick, L.E., 1978, Crowding and personal control: Social density and the development of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 1000-1011.
- Campbell, J.D., Tesser, A., & Fairy, P.J., 1986, Conformity and attention to the stimulus: Some temporal and contextual dynamics. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 315-324.
- Collins, B.E. 1974, Four components of the Rotter Internal-External scale: Belief in a difficult world, a just world, a predictable world, and a politically responsive world. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 381-391.
- Dame, F.C., 1990, *Research methods*. Pacific Grove, CA: Brooks/Cole.
- Deaux, K., Dane, F.C., Wrightsman, L.S. & Sigelman C.K., 1993, *Social psychology in the '90s*. Brooks/Cole Publishing Company Pacific Grove, California. 194-219.
- Deutsch, M., & Gerard, H.B., 1955, A study of normative and informational social influences upon individual judgment. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 629-636.
- Fiske, S.T., & Neuberg, S.L., 1990, A continuum of impression formation, from category-based to individuating processes: Influences of information and motivation on attention and interpretation. *Advances in Experimental Social Psychology*, **23**, 1-74.

- Fleming, J.H., & Darley, J.M., 1990, The purposeful-action sequence and the "illusion of control": The effects of foreknowledge and target involvement on observers' judgments of other's control over random events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **16**, 346-357.
- Glass, D.C., & Singer, J. E., 1972, *Urban stress*. New York Academic Press.
- Gurin, P., Gurin, G., Lao, R.C., & Beattie, M., 1969, Internal-external control in the motivational dynamics of Negro youth. *Journal of Social Issues*, **25**, 29-53.
- Insko, C.A., & Smith, R.H., Alicke, M.D., Wade, J., & Taylor, S., 1985, Conformity and group size: The concern with being right and the concern with being liked. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **11**, 41-50.
- Kruglanski, A.W., & Mackie, D.M., 1990, Majority and minority influence: A judgmental process analysis. *European Review of Social Psychology*, **1**, 229-261.
- Langer, E.J., 1975, The illusion of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 311-328.
- Langer, E.J., 1983, *The psychology of control*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Langer, E.J., 1989, Minding matters: The consequences of mindlessness-mindfulness. *Advances in Experimental Social Psychology*, **22**, 137-174.
- Langer, E.J., & Rodin, J., 1976, The effects of choice and enhanced personal responsibility for the aged: A field experiment in an institutional setting. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 191-198.
- Langer, E.J., & Roth, J., 1975, Heads I win, tails it's chance: The illusion of control as a function of the sequence of outcomes in a purely chance task. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 951-955
- Latané, B., 1981, The psychology of social impact. *American Psychologist*, **36**, 343-356.
- Milgram, S., 1974, *Obedience to authority*. New York: Harper & Row.
- Miller, A.G., 1986 The obedience experiments: A case study of controversy in social science. New York: Praeger.
- Miller, D.T., Norman, S.A., & Wright, E., 1978, Distortion in person perception as a consequence of the need for effective control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 598-607.
- Mirels, H.L., 1970, Dimensions of internal versus external control. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **34**, 226-228.
- Moscovici, S., 1985, Social influence and conformity: In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.). *Handbook of social psychology* (3rd ed., Vol.2, pp.347-412.
- Orne, M.T., & Holland, C.C., 1968, On the ecological validity of laboratory deceptions. *International Journal of Psychiatry*, **6**, 282-293.
- Peterson, C. & Seligman, M.E.P., 1984, Causal explanations as a risk factor for depression : Theory and evidence. *Psychological Review*, **91**, 347-374.
- Phares, E.J., 1976, *Locus of control in personality*. Morris-town, NJ: General Learning Press.
- Raps, C.S., Peterson, C., Jonas, M., & Seligman, M.E.P., 1982, Patient behavior in hospitals: Helplessness, reactance, or both? *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 1036-1041.
- Rodin, J., 1976, Density, perceived choice, and response to controllable and uncontrollable outcomes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 564-578.
- Rodin, J., & Langer, E.J., 1977, Long-term effects of a control-relevant intervention with the institutionalized aged. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 897-902.
- Rodin, J., Solomon, S.K., & Metcalf, J., 1978, Role of control in mediating perceptions of density. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 988-999.
- Rotter, J.B., 1966, Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**.
- Seligman, M.E.P., 1975, *Helplessness : On depression, development, and death*. San Fran-

- cisco: W.H. Freeman.
- Sherif, M., 1935, A study of some social factors in perception. *Archives of Psychology*, **27**, 1-60.
- Sherif, M., 1936, *The psychology of social norms*. New York: Harper.
- Sims, J.H., & Baumann, D.D., 1972, The tornado threat: Coping styles of the North and South. *Science*, **17**, 1386-1392.
- Skinner, B.F., 1971, *Beyond freedom and dignity*. New York: Knopf.
- Tajfel, H., 1982, Social psychology of intergroup relations. *Annual Review of Psychology*, **33**, 1-39.
- Tanford, A.S., & Penrod, S., 1984, Social influence model: A formal integration of research on majority and minority influence processes. *Psychological Bulletin*, **95**, 189-225.
- Wilder, D.A., 1977, Perception of groups, size of opposition, and social influence. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 253-268.
- Wolf, S., 1987, Majority and minority influence: A social impact analysis. In M.P. Zanna, J.M. Olson, and C.P. Herman (Eds.), *Social influence: The Ontario Symposium, Volume 5*, 207-235, Hillsdale, NJ: Ellbaum.
- Wortman, C.B., & Brehm, J.W., 1975, Responses to uncontrollable outcomes: An integration of reactance theory and the learned helplessness model. *Advances in Experimental Social Psychology*, **8**, 278-336.
- Wright, M.H., Zautra, A.J., & Braver, S.L., 1985, Distortion in control attribution for real life events. *Journal of Research in Personality*, **19**, 54-71.